11 月 9 日 メッセージ

聖書：創世記 15 ： 1 － 18a

「アブラハムは主を信じた」

「悪魔の証明」とは、証明することが不可能か、非常に困難な事象を悪魔に例えたものを言います。元来は土地や物品等の所有権が誰に帰属するのか、過去に遡って証明することの困難さを比喩的に表現したものでした。そこから転じて、不存在証明にも使われることになりました。

不存在証明とは、その物や事が「ない」ことを証明することです。「ある」ことを証明するのは、証拠を提示することによって可能です。一方、「ない」ことの証拠を探し出すのは難しいというより、ほぼ不可能です。それと同じように、未来の出来事を現在の時点で証明することもまた人間には不可能でしょう。

「あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」(創世記 15:1)という主の言葉が、幻の中でアブラムに臨んだ時、アブラムは冷静に現実を見つめていました。「わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません」(創世記 15:2)という言葉からは、「後を継ぐ者がいないのだからどうせ何をもらっても仕方ない」という諦めがにじみます。また、「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから」(創世記 15:3)という言葉からは若干の皮肉さえ聞こえるようです。

神はそのようなアブラムの思いを正面から受け止めるのではなく、ある種、一方的に恵みを宣言されます(「見よ、主の言葉があった。『その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。』」創世記 15:4)。そして星空を見せて「あなたの子孫はこのようになる」(創世記 15:5)と約束されるのです。

「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」(創世記 15:6)

私たちはつい、「アブラムは『何を』信じたのだろう」と思ってしまいます。そこに合理的な説明を求めてしまいます。なぜなら、明確な「証拠」が無ければ信じられないと思っているからです。神に「悪魔の証明」を求めてしまいます。

しかし、聖書の描く世界は合理性とは正反対です。理由を挙げて、「だからアブラムは信じた」とは言いません。聖書は「主が主であるだけで信じるに足る」と言っているのです。そこに人間の納得や合理性が入り込む余地はありません。神のなさる業に信頼することが人間として最も大切だからです。

それゆえ、未来のことを心配する人々に向かってイエスは「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ」(マルコによる福音書 12:27)と、神に委ねることの大切さを説きます。「そんなことは全て神に任せて、今、生きているあなたはただひたすら神を見上げて生きなさい」と。

詩人が「主はとこしえに契約を御心に留められる／千代に及ぼすように命じられた御言葉を」(詩編 105:8)と歌うように、神は約束されたことを忘れてしまうことはありません。誰一人欠けることなく、全ての人に恵みを注ぎ続けてくださいます。だから、「アブラムは主を信じた」のです。

一方、ヤコブの手紙は「信仰もこれと同じです。行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです」(ヤコブの手紙 2:17)と、少し手厳しい。信じるだけでは足りない。信じて応えていくことが大切だと続けます。確かに、口で信じていると言い表すだけで何もしなければ、物事は動きません。「神に委ねている」とうそぶいて、全てを神のせいにして自己防衛に専念するだけでは神の望まれる平和は実現しないのです。

もちろん、「できないことを無理矢理行え」と神が命じられているわけではありません。今のあなたにできる精一杯をできる限り続けていくことが大切です。その繰り返しの先に、今は証明することのできない未来が現実化していくのです。そのためにまずは「主を信じる」ことから始めようではありませんか。